

植木鉢の意味するもの
—西洋絵画に表わされた「nature」と「culture」—

学習院大学 有川 治男

15世紀後半以降、現代に至るまで、ヨーロッパ絵画にはしばしば植木鉢に植えられた植物が描かれてきたが、個々の作品のディスクリプションや解説においても、また時代を通じた花卉画の研究、静物画、室内画、風俗画のモチーフ研究においても、それら植木鉢が注目されたことは——より正確に言えば、それらが単なる「植物」や「花瓶の花」ではなく「鉢植えの植物」であることが注目されたことは——ほとんどない。本発表では、それら、絵画に表わされた植木鉢が、一貫して、「nature and culture」というきわめて重要な問題に関わるモチーフとして用いられてきたことを指摘する。

限られた時間の中で美術史における植木鉢モチーフの展開全体を追うことはできないが、3つの特徴的な時期・様相の例示によって、概観を示すことが可能と考える。

まず第一は、ヨーロッパにおける植物描写（絵画、写本装飾、植物図譜のいずれにおいても）の最初のピークであった15世紀半ばから16世紀半ばにかけて、大きな人気を集めたカーネーション。この時期、百合と薔薇に次いで多くの聖母子画に登場するカーネーションは、また、最初の典型的な鉢植え植物（もっぱら鉢で育てる園芸植物）としての姿を多くの絵画に見せている。次に、17世紀から18世紀にかけての庭園の中で植木鉢が占めた役割を、実際の庭園、オランジュリーや、絵画の描写の中に見る。最後に、第三の時期として、近代都市生活の中での植木鉢の新たな意味合いを、ロマン派の室内画から印象派、さらにはマティスなどに至る絵画の中に確認する。この時期の植木鉢の特徴は、それらが戸外から室内へ、あるいは戸外と室内との境界である「窓辺」または「バルコニーの上」へ持ち込まれたということである。

それら3つの時期におけるそれぞれ異なる様相を越えて、しかし、絵画に表わされてきた植木鉢は、基本的には一つの意味方向、すなわち「cultivated nature」という意味を指し示している。つまり、植木鉢、鉢植えの植物は、「人間によってとらえられ、育てられ、改良され、コントロールされた自然」を典型的に示すモチーフであり、そのことを通して、さらに、ヨーロッパ近代文化の中に取り込まれてきた自然そのものの象徴ともなっているのである。

最後に指摘しておきたいのは、植木鉢が窓辺に描かれるとき、多くの場合、それらは「室内の女性」と結び付けられているという、「nature」と「culture」の関係におけるジェンダーの問題と、鉢植えとして愛された植物のほとんどが、ヨーロッパ外からもたらされたものであったという、ヨーロッパと非ヨーロッパとの関係の問題である。ヨーロッパ絵画の中の植木鉢は、何重もの意味において、「境界」の上に置かれているのである。